

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

What the "Shit Field" signifies : reading Tim O'Brien's The things they carried as a literary work

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2002-09-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 篠田, 実紀, Shinoda, Miki メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/867

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



“Shit Field” の比喩するもの——文学 作品としての *The Things They Carried*

篠田実紀

ベトナム戦争文学の最高傑作のひとつである Tim O'Brien の *The Things They Carried* は、ベトナム戦争という歴史的事実を語りながら、数々の文学的メタファーに富んだ作品である。作者と同じ Tim O'Brien という名を持ち、作者ときわめて類似した体験や見解を持つ人物によって語られるこの作品は、一見ベトナム戦争を戦った兵士の自伝的ドキュメンタリーの様相を呈しつつ、実はその語り手と作者が完全に同一ではなく、内容もフィクション的要素が強い。作品中の“Good Form”の表現を借りれば、戦後20年以上を経た中年作家 O'Brien が、自ら戦場で体験した“happening-truth”を記憶の中で醸造し、当時の自己を客観的に眺めることによって“story-truth”へと昇華したのが *The Things They Carried* であると言えるだろう(203)。

その結果読者は多少なりとも“happening-truth”と“story-truth”のはざままで混乱させられることになる。このような混乱について、Steven Kaplan は、実態を明確に把握することが不可能であったベトナム戦争の不確実性を読者に感じさせるよう意図されたものであるという読みを示し(172-92)、Ronald Ringnalda は、O'Brien のこの“metafiction”の手法について、常に確実に信じ得る真実を追求する西洋的価値観への挑戦であるとする(100-14)。これらの文学的な読みに対して Jim Neilson は、ポストモダンの空論だと批判し、ベトナム戦争のもたらした悲劇が後の社会に適切

に作用していくためには、ベトナム戦争文学は文学の領域に閉塞すべきではなく、より政治的に読まれる必要があるとし、“fact”と“fiction”を弄ぶだけで自己の確固たる政治的見解を示さない Tim O'Brien 自身ベトナム戦争の歴史的・政治的意義を理解していないと指摘し、*The Things They Carried* に対しても低く評価する (196-209)。しかし、*The Things They Carried* の語りが、政治的な断定や歴史解釈を避け、“fact”と“fiction”を曖昧にし、数々の不確実な疑問を投げ掛けるという、文学的な形をとるからといって、そこに政治的価値がないと判断するのは早急である。徴兵を受ける前の大学時代、student-body president として大学新聞に自分の穏健な反戦思想を反映した政治記事を書き、復員後 *The Washington Post* でジャーナリストとしての経験を持つ O'Brien が、“happening-truth”を正確に伝え、自己の歴史や政治的見解を記事にすることに徹することはできなかったわけではないはずだ。にもかかわらず、彼が *The Washington Post* を約1年で去り、あえて職業作家となって“story-truth”を伝える道を選んだ背景には彼なりの信念があったと思われる。

The Things They Carried が読者として想定するのは、自分と同じ復員兵や、ベトナム戦争に深い政治的関心を持つ人々ばかりではない。O'Brien は、Brian C. McNerney とのインタビューの中で、“The whole creative joy is to touch the hearts of people whose hearts otherwise wouldn't be touched.”と、自分の作品は自分と体験を共有しない者にむしろ読まれる方が喜ばしいと述べる (25)。*The Things They Carried* は、自己に極めて近接した語り手を創造することにより、ドキュメンタリータッチの「戦争文学」を好む読者を楽しませる傍ら、作品をフィクション仕立てにしてメタファーを用い、文学的要素を加えることにより、自己主張の強いノンフィクション的「戦争文学」に拒絶反応を示す読者層をも取り込むことに成功しているといえる。戦争の話には全く興味のない後者の範疇には、多くの女性が含まれるのだが、その理由として O'Brien は、女性が徴兵されるということ

がなく、女性は戦争から除外されているということと、戦争の話といえば通常 “blood, death, bullets, bombs, purposeless stereotypes, glorification of war” という “bad stories” が多く、女性はそのようなありきたりな戦争の話を好まないということを挙げている (McNerney, 19)。 *The Things They Carried* は、まず冒頭の “The Things They Carried” で Jimmy Cross の想像の中に、New Jersey の大学で英文学を専攻し詩を愛好する、という、戦争とは最も掛け離れた Martha という女性を登場させ、“The Sweetheart of Song Tra Bong” では、ベトナムへやってきて兵士になるアメリカ人女性を登場させるなど、女性の読者の興味を引き付け、凡庸なステレオタイプの戦争表現を極力排除する一方で、意義深いメタファーを効果的に配している。その結果、「戦争」「政治」には関与しようとしなない人でも、この作品をきっかけにそれらの分野に興味を抱くことになる可能性が高まる。その後その読者がベトナム戦争という歴史的事実と真剣に向き合い、その意義を考え始めるとしたら、それは、もともと政治に興味のあった人間が歴史的文献の「事実」や政治的主張の強い作品から考察を巡らすのと同様以上の収穫であると言えるのではないか。

更に、O'Brien が “story-truth” を語ることによって伝えたいのは、“happening-truth” を重視する戦争の話が報道する、いつどこでどんな事件が起こったかという抽象的的一般的事実ではなく、その体験をした者がどのように感じたかという感情的情緒的な部分である。1999年 O'Brien は、The Brown University で行った講演で、*The Things They Carried* 中の一篇 “On the Rainy River” と同様の、1968年自分が徴兵令状を受け取ったときの話を語ったあと、次のように述べる。

War stories aren't always about war, per se. They aren't about bombs and bullets and military maneuvers. They aren't about foxholes and canteens. War stories, like any good story, is finally about the human heart. About the choices we make, or fail to

make. The forfeitures in our lives. Stories are to console and to inspire and to help us heal.... And a good war story, in my opinion, is a story that strikes you as important, not for war content, but for its heart content. (Writing Vietnam)

そして、自分の語った話が“happening-truth”ではなく、作り話であるという点を指摘し、このような fiction を創造し、読者を話に惹き付けることによって始めて、実際に正しくないと信じていた戦争に徴兵されることになったときの自分の感情や情緒を読者に実感させる効果が出るという。O'Brien は、*The Things They Carried* 執筆後、しばしば大学で講演や朗読を行い、ベトナム戦争のころの自分と同じ年頃の大学生たちに戦争の話を語り聞かせることが多い。O'Brien の意図は、戦争体験を持たず、抽象的な史実の知識しかない現代の学生たちに、自分が何をしたかではなく、自分がどう感じたかを伝え、今もし君が同じ状態になったら、という仮定の中に彼等を放り込むことにより、戦争や政治に対して一般化してしまいがちな彼等の感覚を刺激することであると思われる。

この論文は、あえて Kaplan や Ringnalda の姿勢を踏襲し、*The Things They Carried* を“story-truth”を盛り込んだ文学作品として読む。ここでは、特に、後半の語りに注目し、“Speaking of Courage”, “Notes”, “In the Field”, “Field Trip”を通し、アルファ中隊で最も高潔な Native American の兵士 Kiowa が、排泄物の濁流に吞まれて死ぬという皮肉な悲劇の背景となる“shit field”というメタファーの象徴性を中心に論じることとする。

1) “Speaking of Courage” : Norman Bowker の逡巡と湖

“Speaking of Courage” は、アルファ中隊の兵士 Norman Bowker にまつわる物語である¹。舞台はベトナム戦争後、Norman の故郷 Iowa の小都

市。Normanは復員後、両親の許に身を寄せ、定職もなくぶらぶらしている。独立記念日のこの日も、彼は父親のシボレーに乗り、特に行くあてもないまま湖の周囲を何度も廻る。湖のまわりの情景に目をやりながら車を運転するNormanの脳裡によぎるのは、戦争中Native Americanの戦友Kiowaを失った夜の記憶である。隊長Jimmy Crossの不適切な判断により、村人が公衆便所として利用している土地に野営してしまったアルファ中隊は、降りしきる雨の中、敵の迫撃砲攻撃を受ける。川は氾濫し、周囲一帯は排泄物の悪臭に満ちた“shit field”と化す。Normanは、この汚物の濁流の中に流されたKiowaを救おうと試みるが、激流の力と異臭に負け、一旦は掴んだKiowaの足を放してしまう。Normanは、もしもあのときKiowaの足を放さなかったら、戦友を救った勇氣ある行為の報いとしてsilver starの勲章をもらえたかもしれない、という後悔の念にかられている。彼はだれかにこの「戦争の話」をしたいと思うが、できない。ここではNorman Bowkerの湖の周りの逡巡と、“shit field”のイメージをだぶらせる湖の象徴性を中心に考察する。

“Speaking of Courage”とその舞台裏となる“Notes”に表れるNorman Bowkerの苦悩は、程度の差こそあれ、ベトナム戦争から帰還した兵士たちが一様に持っていた疎外感であるといえよう。アメリカ合衆国史上初の不名誉な戦争を体験した彼等は、英雄として華々しく迎え入れられた従来の復員兵とは全く異なる反応で、いわば招かれざる客としてアメリカ社会に帰還する。反戦論者たちからあからさまな敵意を向けられることもあったが、それ以上に彼等の精神的ストレスを助長したものは、元来傷ついた自分を保護してくれるはずのコミュニティからの不自然なよそよそしさであった。Normanは語り手Tim O'Brienへの手紙の中で“I don't feel like anybody mistreats me or anything, except sometimes people act *too nice*, *too polite*, like they're afraid they might ask the wrong question”と打ち明けているが、Normanの周囲の人々は、家族をも含め、まるで腫れ物に触

るかのように Norman に接するのである (178)。周囲の配慮は、最終的に戦争の話題に触れないという形をとって表れる。一方 Norman の方は、戦争を語りたい、そのことによって不名誉な戦争の復員兵としての自己をあるがままに受け入れてほしい、にもかかわらず自分が戦争の話をしたから聞いてくれと切り出すことができずにいる。通常「戦争の話」といって想起される武勇談を語ることは彼にはできない。彼が戦争から得た収穫といえば、時計なしで直感だけで時刻を言い当てるという特技くらいのものだが、目下これといった身分もない彼にとっては時計時間そのものが不必要だというのがいかにも皮肉である。結果として Norman は自己を、戦争とは無縁のコミュニティから疎外された存在であると感じるようになる。

“Speaking of Courage” の語りは、湖のまわりをあてもなく逡巡する Norman の現在と、彼の意識の中に展開するベトナムの “shit field” における過去の出来事を交錯させる。Norman は、戦争中のこの一夜の話を故郷の誰かに聞いてほしいと切望するが、自ら口を開こうとしない。話の聞き手として彼は、自分の父親、戦争に行く前は時々デートした友だちで今は別の男性の妻となっている Sally Kramer (Gustafson)、そして自殺か事故死か定かではないが湖に吞まれて命を失った友人の Max Arnold、という 3 人の人物を想定する。しかし、最も話を聞いてくれそうな Max は既に世にない。そこで Norman は、自分が父親、あるいは Sally に “shit field” での一夜にまつわる話をする場面を想像するが、これらの会話は結局実現することなく終わってしまう。好意を寄せている Sally には、もちろん話したいのではあるが、今は人妻になって近付き難い。その事実とは別としても、彼女は、Norman の時計なしで時刻を言い当てるという特技に興味を示すが関の山で、戦争の話となると、“shit” という語を耳にただけでも拒絶反応を起こしてとても話を聞いてくれそうにないと諦める (164-65)。父親は、Norman の復員後、テレビばかり見て息子との会話の道を閉ざしている。

“A pity about his father, who had his own war and who now

preferred silence.” という記述からは、父親自身第2次世界大戦を戦った兵士であった可能性が読み取れる(166)²。本来であれば同じ戦争体験者として親子で語り合う時間があってもよさそうなものであるが、父の戦争と息子の戦争では社会的評価にあまりの隔たりのゆえにどう切り出したらいいかわからないのか、戦争によって息子が負った精神的な傷をこれ以上深めたくないという気配りからか、あるいは戦場で際立った武勲も立てなかった息子への失望からか、父は息子との間に壁を設けてしまっている。定職につかずにぶらぶらしている息子の生活態度を批判することもない。息子の方も、父に話を聞いてくれと迫ることもなく、ただ彼の自家用車を借りて乗り回すのみである。息子には、自分は父が望んでいると思われるような武勇談ではなく、武勲をたて損なった話しかできない、という点に負い目がある。こんな話をしても父は喜ばないだろうという、息子なりの配慮がここにある。父子ともに自分から切り出せば相手も話に乗ってくるかもしれないのに敢えてしないというのは、このような双方の気配りに加えて、そうすることによって互いが気まずい思いをするくらいなら、極めて不自然な形であるにせよ、一応外見的には平和な均衡を保っている親子関係を維持したいという気持ちからであろう。

Norman Bowker は、ベトナム戦争によって変質してしまった自己とそれを歓迎しない故郷のコミュニティとの間に大きな壁が存在することを意識しながらも、そこから抜け出して新たな人生を歩むという決断をするには至らない。社会的にも経済的にも一個の人間としての自己を確立しない状態で戦争という異常な現実の中へ身を投じてしまった Norman にとって、戦争とは隔絶したもとの社会に復帰しようとして暗にそれを拒まれたとしても、その社会に挑戦したり背を向けたりできるほどの精神力を持ち合わせていたとは考え難い。その一方で彼は、自分の中にあるベトナム戦争の記憶を清算して新たな自己を確立した上でもう一度社会に受け入れられようという努力もしない。彼はいつまでも Kiowa を失った夜の記憶を引きずったまま故郷で

生活しようとする。

故郷の日常に再び溶け込みたいがベトナムの記憶からも訣別できないという Norman の中途半端な精神状態は、父の車に乗って湖のまわりをゆっくりドライブするという行為に象徴される。彼は父親の大きなシボレーの中にと “safe” であると感じる (157)。いまだ自己確立できていない彼は、父の大きな車の中に身を置くことにより、父によって保護されているような気分になるのである。車外にあるのは故郷の日常であり、Norman は、外気と直接接触れる徒歩や自転車やオートバイではなく、乗用車という特殊な空間の中に自らを閉じ込め、エアコンをかけて窓を閉めることによって外の社会との間に壁を設け、外部の社会に直接接触れないことによって “safe” であると感じている。更に、停車するでもなくスピードを出すでもなく、周囲の情景を見渡しても危険ではない程度の速度で車を進ませるといふ彼の運転方法は、社会に自己を認めてほしいと願いつつも社会と交わる勇気を奮い起こせず、父の庇護のもとをはなれて自立し、自ら積極的に新たな人生への活路を探ることもできない Norman の心の迷いを反映する。

彼が湖の周りを巡るたびに通過する二人のキャンプスタイルの少年たちは、おもちゃのライフルと水筒を持ち、兵隊ごっこのようなことをしているようであるが、彼等の姿は、想像上の英雄として兵士に憧れた少年時代の Norman の姿を彷彿とさせる。そして、この少年たちの登場により、実際に兵士となった Norman が、憧れどおりの勇気ある英雄となることはできず、“shit field” に沈み行く戦友を結果的に見殺しにしてしまった話しかできない、という皮肉な現実がより一層強調される。この少年たちの他に Norman の目に映るのは、エンストしたモーターボートと格闘している男性、ウォータースキーヤー、高校のブラスバンド、釣り糸を垂れる女性、などであるが、これらの人々が生活する街は、Norman にとっては、“remote”, “dead”, “still and lifeless”, “quaint” なものとして、自分からは掛け離れた別世界のように見える (159, 162-63, 166)。

それでも Norman は、何とか街の人々とコミュニケーションをとろうとする。A&W でハンバーガーを注文するが、インターフォンでオーダーするシステムや新しいスラングについていくことができない。湖の周りをまわる 11 巡めで彼はエアコンを切って窓を開き、外気に触れながら運転する。しかし、“There was nothing to say./ He could not talk about it and never would.” とあるように、彼は結局何も語ろうとしない (172)。

Norman の故郷への思いは複雑である。この街には Norman のような帰還兵の話は快く受け入れてくれるような雰囲気はない。

The town could not talk, and would not listen. “How’d you like to hear about the war?” he might have asked, but the place could only blink and shrug. It had no memory, therefore no guilt. The taxes got paid and the votes got counted and the agencies of government did their work briskly and politely. It was a brisk, polite town. It did not know shit about shit, and did not care to know. (163)

この街は遠く離れた異国の土地での “shit-field” の現実には関与しようとし、目を向けようとし、Norman はそのような故郷に対して快く思うことはないのであるが、あえてその無関心を批判することもできず、そこから抜け出すこともできない中途半端な気持ちである。あの悪臭さえなかったら、Kiowa を “shit field” から救い出した勇気に対して Silver Star を授けられたであろう、という話は、“good war story” ではあるかもしれないが、実際は悪臭に耐えかねて Kiowa を救出できなかったのであり、“good intentions and good deeds” を求める街の人々は、そんな悪臭の話を知りたいとは思わないだろう、と Norman は諦める。しかし彼は、自分の話に耳を貸さないであろう街の人々を責めることはせず、むしろベトナムの貧しい村とは異なり、ここは衛生設備の整った “a nice little town” と評する (169)。

次に、“Speaking of Courage”の話がアメリカの独立記念日に設定されているという点をめぐって、Norman Bowkerの祖国アメリカへの思いについて考えてみたい。Normanの故郷へのこだわりは上述したとおりだが、復員兵と故郷との関係は更に彼等の祖国との関係へも敷衍されると言ってもよい。アメリカ人にとって最も重要な祝日といってもいいFourth of July、強いアメリカという国のプライドを国民こぞって確かめ合うこの日、そのクライマックスである名誉ある戦いからの復員兵のパレードに加わることのできないNormanは、それを嘆くこともなく、さりとは不名誉な戦いに自己を駆り立てた祖国を恨んだり反戦思想を持つこともない。ベトナム戦争に赴いた者の多くは、祖国アメリカへの忠誠心の証しとして出征し、ある種の裏切りを感じて帰還した。その後反戦運動に身を投じた者もあるが、たいがいの者にとって、Norman Bowkerのように、祖国の非を告発するよりも、再びアメリカ社会へ受け入れられたいという願望の方が強かったといえよう。また、Normanの乗る父の車は、アメリカでは最も一般的な車種のひとつである“Chevy”である。この車を運転するNormanには、父親からの庇護を感じ取ると同様に、父親的象徴として存在するアメリカ合衆国からの保護への願望も感じ取れるかもしれない。

語り手O'Brienは“Notes”の中で、“Speaking of Courage”の情景は、自身の故郷MinnesotaのWorthingtonの街をうつしたと言っている(180)。Normanの街の人々のベトナム戦争に対する無関心さはまた、徴兵令状を手にした語り手が“On the Rainy River”の中で、同じ中西部のWorthingtonの街の人々の無知無関心に対して次のように批判する態度と重なる部分がある。

I'd be screaming at them, telling them how much I detested their blind, thoughtless, automatic acquiescence to it all, their simple-minded patriotism, their prideful ignorance, their love-it-or-leave-it platitudes, how they were sending me off to fight a war they

didn't understand and didn't want to understand. (48)

作者 O'Brien は、前述のように、1999年 The Brown University で行った講演でもこのときの心境を語るが、下の引用部分は、故郷の人々への嫌悪感を抱きつつ、故郷へ、そして祖国へと引き付けられる Norman Bowker の心境と類似している。

Uh, I opposed it [i.e. the Vietnam War], but on the other hand, I was a child of Worthington, Minnesota. I didn't know everything. Uh, I didn't know much about the history of Vietnam, the politics of it all-maybe I was mistaken. Beyond that, I felt drawn by America itself, even by this little shitty town that I told you about. I felt drawn to it because, as bad it was, it was mine, and I didn't want to leave it, and I didn't want to leave America. (Writing Vietnam)

たしかに、作者と近接した *The Things They Carried* の語り手と Norman とは、その戦後の生き方においては異なっている。前者は、“Notes”でも語るとおり、戦後故郷を去ってハーヴァード大学の大学院に入学し、作家となって戦争を語り、故郷の人々を公然と批判する (179)。後者の方は、いつまでも故郷を離れることができず、故郷の人々に戦争を語りたいという強い願望を持ちながらそれを果たすこともない。しかし、“Speaking of Courage” を読む者は、Norman の故郷への執着に、同じ中西部の故郷を批判しつつも故郷を愛し、その人々に対する体面を失うことをおそれたために、自ら正しくないと感じている戦争に行ってしまう “On the Rainy River” の語り手 O'Brien の良心の迷いを想起する。また、作者自身、“Speaking of Courage”, “Notes”, “In the Field” の “shit field” の話の主要登場人物は Norman Bowker ではなく自分であると言っている (McNerney, 8) ことからわかるように、“Speaking of Courage” の Norman は、もし

O'Brien が戦後故郷に残っていたらなっていたかもしれない姿のひとつであると考えられる。³

最後に、“Speaking of Courage”における湖の象徴性を考える。この湖は、Norman Bowkerにとって故郷の中心的情景であり、故郷の街を代表する事象となる。同時に、水質的に水泳にも釣りにも適さないこの湖は、ベトナム戦争を思い出させるものの何もない故郷で疎外されたNormanにとって、“shit field”の泥流を想起させるものとして、戦争との唯一の接点ともなる。更にこの湖は、“On the Rainy River”で語り手が戦争へ行くかカナダへ逃げるかという厳しい二者択一に迫られるRainy Riverの情景をも想起させる。湖もRainy Riverも、共にNormanと語り手の心の迷いを象徴するといえる。

12回も車でこの湖の周囲を廻ったあと、Normanは湖の中に入って行くが、この行為から、彼がここで入水自殺をするのではないかと感じる読者も少なくないと思われる。故郷とベトナムの接点となる湖へ人知れず身を沈めることになれば、Normanの中の故郷や祖国への愛憎が交錯した複雑な感情の乱れがある種鎮められるような結末となろう。しかし、実際は彼は水中に沈み込むのではなく、水に入って独立記念の花火を見ながら「小さい街にしてはなかなかいいショーだ」と結論づける(173)。“Speaking of Courage”はここで終り、次の“Notes”で、実はNormanは、その3年後YMCAで少しバスケットボールをしたあとロッカールームで首吊り自殺をしたのだということがわかる。入水自殺ではなく、アメリカ人の好んで使用する施設での首吊り自殺は、故郷や祖国への愛憎を引きずったままのNormanの、中途半端な心の揺らぎを象徴する。更に、入水自殺に比べて発見される確率の高い自殺法を選ぶことにより、Normanは、復員兵として苦悩する自己の存在を闇に葬り去られることを拒んだのである。

2) “In the Field” と “Field Trip” : 責任の所在

“Speaking of Courage” で Norman Bowker の記憶を通じて断片的に語られる Kiowa の死にまつわる “shit field” での一夜の出来事は, “In the Field” でより具体的な形をとって明らかとなる。しかし “In the Field” においては Norman Bowker は Kiowa の遺体を発見するものの, 脇役的位置に下がっている。“Speaking of courage” は, Norman Bowker が Kiowa の死に深く関与していたかのような印象を与えるが, “In the Field” においては Kiowa の死に対する責任は, 主として隊長 Jimmy Cross と, Kiowa と同じテントに野営した “the young soldier” に課せられ, 語りは, この両者の内面描写を交えながら進んで行く。

Jimmy Cross は, 自分が村人たちの忠告にも耳を貸さず, 上からの命令に固執して不適切な場所に野営した自分の誤った判断が Kiowa の死をもたらしたという自責の念にかられる。彼は自己の誤った選択を “Crime” (187), “My fault” (192) と責め, 想像の中で Kiowa の父にあてた手紙を何通りか考える。責任感のある隊長としてふさわしい手紙とはどのようなものか, Jimmy は模索するが, 満足のいく手紙を考えつくには至らない。このような Jimmy の内省とは裏腹に, 語り手は, Jimmy が, 周りの状況に流され, 大した思慮もなく “unprepared” な状態で志願し, 資質もないのに自動的に隊長になったにすぎない, 隊長としては不適格者であることを暴露する (190)。

固有名詞をつけられることのない “the young soldier” は, テントの中で Kiowa と共に不安な雨の夜を過ごすうち, 自分のガールフレンドの写真を Kiowa に見せようと懐中電灯をつけるが, その灯が敵に発見されて迫撃砲の攻撃を受けることになってしまう。また, “Speaking of Courage” で Norman Bowker が語りたくて語れなかった話のクライマックスとなる, 一旦 Kiowa のブーツをひっぱって救出を試みたが果たせず, 放してしまったという行為は, “In the Field” ではこの “the young soldier” の行為とし

て語られる (193)。彼もまた、Jimmy Cross と同様、懐中電灯で敵を誘い出してしまった自己の浅薄な行為を “Like murder” と責め、戦友の死に対して “guilt” を感じている (192)。

悪夢のような雨の夜の翌朝、みんなが Kiowa の遺体を搜索しているとき、“the young soldier” は、自責の念とは裏腹に、遺体ではなく、泥水の中に失ってしまったガールフレンドの写真を探している。これを知った Jimmy Cross は、しかし、彼を責めることはない。

He felt some pity come on him. For a moment the day seemed to soften. So much hurt, he thought. He watched the young soldier wading through the water, bending down and then standing and then bending down again, as if something might finally be salvaged from the waste.

Jimmy Cross silently wished the boy luck. (194-95)

Jimmy Cross は、Kiowa の死にまつわる自責の念が強いあまり、部下を責める立場にないと思ったのかもしれない。或いは、この作品の冒頭 “The Things They Carried” で、この若い兵士と同様彼自身愛する女性 Martha の写真を持ち歩き、彼女のことを想像して戦争の現実集中できなかったために部下の Ted Lavender を失ったという経験から、若い兵士を責める気持ちになれないのかもしれない。いずれにせよ、この場面における Jimmy Cross と “the young soldier” は、隊長と部下という上下関係の希薄な、同様にナイーブな若者として描かれている。

Kiowa の死に関しては、“Speaking of Courage” では Norman Bowker に、“In the Field” では Jimmy Cross と “the young soldier” に、そして “Field Trip” では語り手自身に責任があるように書かれているが、だれのせいなのか最終的に特定されることはない。このことに関連して、まず “the young soldier” の名前が明かされないことについて考えてみたい。ひとつの推測として、この兵士は語り手自身ではないかという見方がある。

“In the Field”ではこの兵士が、最初の迫撃砲攻撃のあと Kiowa の叫びを聞いた (193) とあるが、この描写は、ずっと前に “Spin” の中で語り手が、戦後年月を経ても記憶の中にあられる “bad stuff” の一例として “Kiowa yells at me.” (36) という一文と呼応すると考えることは可能だろう。また、“Notes” の中にも、自分が親友 Kiowa の死に関与しており、それについて語ることが後ろめたいという内容のことを言っている (181, 182)。更に、“Field Trip” では、語り手自身が Kiowa のモカシンを、問題の夜に “shit field” と化した川に流すところからも、“the young soldier” が語り手だという推測は成り立つ。前述のインタビューでも見たとおり、作者は、“shit field” の話の主要登場人物は自分であると言っており (McNerney, 8)、“Speaking of Courage” から “Field Trip” までの話はすべて、戦後20年を経た語り手、そして作者自身の自責の念 (guilt) の描出であると言ってもよい。しかし、“the young soldier” は、作者に限定せずともだれであるとも解釈可能であり、そのことは即ち彼のような行為をだれがとってもおかしくはないということ象徴する。語り手をも含め様々な人物の自責の念を語るこれらの話は、責任の所在を明らかにするのではなく、登場人物全般に共通する自責の感情そのものを読者に伝えようとしているといえよう。

“Speaking of Courage” では、最後に Norman Bowker が “shit field” のイメージを重ね持った湖に入るが、Kiowa の死後アルファ中隊の兵士が現実の “shit field” の水に意図的に入るシーンは、“In the Field” と “Field Trip” に見られる。“In the Field” の最後の部分では Jimmy Cross が汚泥の中にのどまで浸かり、これが “truth” だと自己に言い聞かせようとし、“Field Trip” では20年後自らの10才の娘を連れて再び同じ土地を訪れた語り手が、かつて Kiowa を呑み込む濁流と化した川の中に座り込み、Kiowa の遺品のモカシンを流す。三者は三容に、戦友の死に対して罪の意識を感じ、汚水に浸かることによって友の苦痛を少しでも共有し、自己の罪

の重みをいくらか軽減しようとするのだろう。

年月を経てかつての“shit field”の地に立った“Field Trip”の語り手は、“For twenty years this field had embodied all the waste that was Vietnam, all the vulgarity and horror.”と自己の心境を語る(210)。この部分に現れるように、この作品の登場人物中最も人間として評価の高いKiowaを呑み込んだ“shit field”は、ベトナム戦争そのものの邪悪さの象徴として、この戦争に参戦したアメリカ人の若者とそれ以外の者との境界に存在する。そして、Kiowaの死後、生き残った三人の登場人物が“shit field”の汚水に身を浸す行為は、この戦争の邪悪さを体験し、二度と戦前と同じ無垢な若者としてアメリカに帰還することがないという厳しい現実の確認でもある。また、The Things They Carried中の戦後のエピソードが中心となる話は、“Love”、“Speaking of Courage”、“Notes”、そして“Field Trip”であるが、そこに登場する元アルファ中隊の兵士が、この三人だけであるという点も興味深い。即ち“shit field”は、生き残った兵士たちが一様に、その後の生涯を通して背負うもの(the things they carry)、記憶から消すことのできない重荷の象徴でもある。

Tobey Herzogは、“Field Trip”で語り手が泥の川に入ってモカシンを流す行為について、語り手は“forgiveness, closure, and healing for his war experiences”を模索していると解釈する(118)。このことは、Norman BowkerとJimmy Crossにはあてはまるかもしれない。しかし、語り手の場合はそれだけで終わってしまうことではない。単に自己の贖罪のためだけなら娘を同行する必要はないのではないか⁴。Norman, Jimmy, そして語り手は同様に汚水に身を浸すが、この行為に関心を示す傍観者の存在がいるのは、語り手の場合のみである。Normanの場合にも行為を見ている者はあるかもしれないが、彼の行為に関心を持つ人はいないようである。Jimmyの場合も、だれかに見られていると考えられるが、傍観者はすべて事情のわかった同じ部隊の人間である、という点が語り手の場合と異なる。即ち、Norman

と Jimmy の行為は、戦争の傷を癒す自己満足に終始し、戦争を知らない者に戦争を伝えるということはない。彼等はその心に背負う “shit field” の重荷について、戦争を知らない者に何ら語ることすらなく、自己の殻の中に閉塞するだけである。確かに、“Field Trip” の語り手は、娘を “shit field” へといざなうだけであり、その地で起こった過去の忌まわしい出来事の話をするわけではない。傍観者である娘の Kathleen にとっては、ベトナム戦争など「穴居人や恐竜と同じくらい」 “remote” なものである。彼女には父の行為は理解の域を越えるものであり、こんな臭くて汚い泥の中で泳ぐなんて、あとでお母さんに言い付けるわよ、と非難する。しかし、ベトナム戦争について何ら関心を持とうとせず、“shit” という言葉を聞いただけで拒否反応を示す Sally に代表される Norman の故郷の人々とは異なり、少なくとも Kathleen はかつての “shit field” に足を踏み入れた。今は理解できなくても、Kathleen はいずれ成長すれば父のこの奇行の意義について、さらにはベトナム戦争について真剣に考えるかもしれない。父によってベトナムへ伴われ、“shit field” だった場所での父の奇行を見せられたこの Kathleen は、また、戦争体験もなく、自らは戦争に無関心であっても、*The Things They Carried* という作品との出会いによって “story-truth” の戦場へと引きずり込まれて行く読者の分身でもある。

3) “The Ghost Soldiers” : 魂の泥沼

“The Ghost Soldiers” は、戦争中の語り手自身を主人公とする話である。語り手は、彼の負傷を上手に処置することができなかった新米衛生兵 Bobby Jorgenson を恨み、彼に復讐を試みる。この話は、上で見てきた “shit field” における Kiowa の死にまつわる話の直後に位置するが、内容的には直接 “shit field” と関係しない。しかし “The Ghost Soldiers” を読む読者の心には、衝撃的な “shit field” の話の余韻が残っているだろう。戦争の邪悪さの比喩としての “shit field” は、“The Ghost Soldiers” で

は、語り手自身の精神状態の中に姿を変えて登場するのである。

*The Things They Carried*の中で語り手 O'Brien が中心的存在となる話は、ベトナム戦争へ行くべきか否かの葛藤を描く “On the Rainy River”, 手榴弾で敵を殺したエピソードを語る “The Man I Killed” と “Ambush”, そして、この “The Ghost Soldiers” である。これらの話には、Herzog の言葉を借りると、語り手自身の行為に対する罪の意識 (“guilt”) の感情が一貫して流れており、その感情は一連の “shit field” の話においても Norman Bowker やその他の登場人物の感情として描かれる (115-18)。また、*The Things They Carried* 全体を通して強くて勇敢なヒーローが登場することはないが、語り手を主人公としたこれらの話では、殊更に語り手の臆病さが目立つ。語り手は、“On the Rainy River” では、戦争に行った自己を “I was a coward” と結論し (63), “Ambush” では、敵の兵士を殺した行為もまた、適切な判断によってではなく、恐怖のあまり自動的に手榴弾を投げただけだったと告白する (147, 149)。“The Ghost Soldiers” においても語り手は臆病者であるが、それだけではなく、語り手は卑劣で幼稚でもある。負傷のため戦線の後方に下がった語り手は、再会した Bobby が新米であった故の自己の不手際を認めたにもかかわらず、復讐に固執する。復讐といっても、漆黒の暗闇で花火のような仕掛けを使って Bobby を怖がらせるという単純で幼稚きわまりない子供だましである。最終的に語り手が復讐に至る動機も、表面上は Bobby が適切な傷の処置をしなかったために自分が死の恐怖を感じたからであるが、実は負傷のため自分が中隊を離れて戦線の後方に下がることになり、その結果中隊の仲間と再会したときに疎外感を味わい、以前の自分とって替わったように中隊の一員として溶け込んでいる Bobby に嫉妬したから、という屈折したものである。

しかも、語り手 Tim O'Brien は、この復讐を単独で行うことができない。初めは Mitchell Sanders に話を持ちかけるが断われ、Azar を相手に選ぶことになる。Mitchell は、事の経緯を冷静かつ客観的に判断し、衛生兵と

しての経験のなかった Bobby の不手際は仕方のないことで復讐する必要はないと言うが、Tim は聞き入れず、Bobby の肩をもつ Mitchell に憤り、かえって Bobby への復讐心を募らせることになる。*The Things They Carried* のアルファ中隊の中では、比較的判断力のある Mitchell とはまったく対照的に、Azar は、いつもたちの悪いいたずらをしたり汚いジョークをとばしたり、最も卑劣な嫌われものとして描かれている。悪戯を好む Azar は、語り手の話に乗り、喜々として復讐計画を進めていくが、その一方で語り手の Bobby Jorgenson に対する当初の怨恨感情はしだいに麻痺し、「まるで他人の戦争のために装備しているような」気分になってゆく (229)。

平和な文明社会で生命の危機に脅かされることもなく優等生として生活していた語り手が、ベトナム戦争という全く新しい環境に置かれたとき、それまで隠されていた邪悪な部分が顔を出す。

Something had gone wrong.... For all my education, all my fine liberal values, I now felt a deep coldness inside me, something dark and beyond reason. It's a hard thing to admit, even to myself, but I was capable of evil. (227)

自分で自分が制御できなくなった状態は、徐々にエスカレートし、“The Ghost Soldiers” というタイトルにふさわしい超自然現象として描写される。復讐しようとする語り手は、良心のある本体から離脱して Bobby にとりつく “ghost” のように描かれ (234-35)、遂にはその離脱状態は、語り手が負傷した際の幽体離脱の臨死体験の記憶と交錯し、離脱した自己が “genie” となって語り手の本体にはほほえみかける (238-39)。そして、怖じ気づいた語り手の本体に代わって復讐の主導権を握る Azar は、この “genie” の化身であるとも言える。すっかり消極的になって復讐を止めようとする語り手の本体は、Azar から侮蔑の言葉を浴びせかけられることになる。他方 Bobby は、この復讐の仕掛けに最初は驚くが、すぐに O'Brien の仕業と見

破り平静を保つ。やめてくれと Azar にすがり、腰抜けのようにならずくまって震える臆病な語り手の目に、Jorgenson の落ち着いた “grace” とすら映る (241)。

“On the Rainy River” の最後で、周囲の評判を良心に優先させて戦争へ行った自己を “coward” と結論づけた語り手が、自己の臆病さ、罪深さを寓意的に表現したのが “The Ghost Soldiers” であるといえる。そして、戦争という外的表象を比喻する一連の “shit field” の話の直後に配されるこの話は、語り手の心理的 “shit field” 即ち今まで語ることを憚ってきた、泥沼のような心の闇の部分を一掃することになる。更に、最後に Azar によって頭部を足蹴にされるという屈辱的な仕打ちは、語り手が平和なアメリカ社会で自らの頭脳の中で育んできたあらゆる教育や価値観が、ベトナム戦争という現実の中であって如何に脆く崩れ去り、心理的泥沼にとって替わられるかを象徴している。

“The Ghost Soldiers” の幼稚な復讐劇は、アメリカのベトナムへの軍事介入、ひいてはアメリカの外交政策全般を比喻しているかもしれない。トンキン湾でアメリカの軍艦が北ベトナムの攻撃を受けたことによって北爆が、日本軍の真珠湾攻撃によって広島・長崎への原子爆弾投下が、イラクのクウェート侵攻によって湾岸戦争が、正当化された。相手が新米兵であるという事実も顧みず、Mitchell Sanders の意見も聞かず、一方的に復讐に乗り出す Tim O'Brien の姿には、一国のごく限られた価値観を全世界の出来事に適用し、それに反した行為を行う国には「自由の敵」のレッテルを貼り、その国の状況を深く考慮することもなく「報復」措置をとるアメリカ合衆国のイメージが重なってならない。現在、2001年9月11日にハイジャックされた旅客機が世界貿易センターに激突した事件に対する「報復」へとアメリカ国内の世論が動きつつある。国民の多くは、今もなお、Tim O'Brien が “On the Rainy River” や “Speaking of Courage” で批判した故郷の人々のように、

自ら戦争の現実や報復相手の事情を知ろうともせず世論に流され無批判に若者を新たな戦争へと送り出そうとしている。一文学作品に戦争を止める力などない。しかし、少なくとも *The Things They Carried* を読んで “shit field” の重圧を心の中に背負った者は、安易な愛国心に走ることを躊躇するだろう。

註

- 1) 語り手 Tim O'Brien を限りなく作者に近づけて “Speaking of Courage” と “Notes” を読んでいくと、読者は Norman Bowker は実在の人物であるという印象を受ける。しかし、作者 O'Brien は、Martin Naparstek とのインタビューにおいて、Norman Bowker という人物も、“Notes” のコメンタリーも、すべては架空のものであると言う (8)
- 2) ここでの “his own war” は、現実の戦争ではなく、比喩的な戦争即ち何らかの精神的葛藤と解釈することも可能である。
- 3) 戦後比較的容易にアメリカ社会での民間人としての生活に適応できた点について、作者 O'Brien は、自分は戦争に行く前から既に “On the Rainy River” にあらわれるような強い良心の葛藤を体験しており、自らの良心に反して誤った戦争へ赴く行為を臆病なものであることを意識していたため、初めは自己の行為を正しいと信じて戦争に身を投じた者が戦争から帰った後で自己の非に気づいたことによる “horrible aftershock” を体験せずに済んだからであろうと述べる (Herzog, 18)。もし罪の意識を持たずに参戦していたなら、O'Brien もまた、Norman Bowker と同様の “aftershock” を体験したかもしれない。しかし、O'Brien は、上の Herzog とのインタビューで、良心に反して戦地へ赴いた故に、自分の罪は、自己の行為を正しいと信じて参戦した者の罪よりも重いと付け加えている。
- 4) ここに登場する娘の Kathleen は、架空の存在である。作者には現在に至るまで子供はいない。ちなみに、この話の中のベトナム行きも架空の話であり、作者が戦後実際にベトナムに戻るのは1994年のことである。

参考文献

- Herzog, Tobey C. *Tim O'Brien*. New York: Twayne, 1997.
- Kaplan, Steven. *Understanding Tim O'Brien*. Columbia: University of South Carolina Press, 1995.
- McNerney, Brian C. “Responsibly Inventing History: An Interview with Tim O'Brien.” *War, Literature, and the Arts* 6.2 (Fall 1994): 1-24.
- Naparstek, Martin. “An Interview with Tim O'Brien.” *Contemporary Literature* 32. 1 (1991): 1-11.

Neilson, Jim. *Warring Fictions: American Literary Culture and the Vietnam War Narrative*. Jackson: University Press of Mississippi, 1998.

O'Brien, Tim. *The Things They Carried*. 1990. New York: Penguin, 1991.

---. Writing Vietnam. The Brown University Department of English and Creative Writing Program. (21 April 1999): Online. Internet. 7 August 2002.